

万葉集3795番歌の「物不言先丹」の訓釈について

竹生 政資¹, 西 晃央²

An Interpretation of the Fourth Phrase of the 3795th Poem in Manyo-shu

Masasuke TAKEFU, Akihiro NISHI

要 旨

万葉集3795番歌は竹取の翁から諭された九人の若い娘たちのうちの一人が自らの行為を反省して詠んだ歌である。原文は「辱(尾) 忍辱尾黙無事物不言先丹我者将依」であるが、通説ではこれを「辱(を) 忍び 辱を黙して 事もなく 物言はぬ先に 我は寄りなむ」と訓読し、「辱を忍び、辱をだまって、何事もなく、かれこれ物を言わない先に、私はこの老翁に靡き寄りましょう」と解している。

しかし、従来の訓釈にはいくつか問題がある。最大の問題は、原文第四句「物不言先丹」の訓み方である。通説では「物言はぬ先に」と訓んでいる。日本語では「物を言う前(先)に」という表現はあるが、「物を言わない前(先)に」という表現はない(意味をなさない)。本論文では、こうした従来の訓釈の問題点を再検討した上で新たな訓釈を提案する。

1. はじめに

万葉集卷十六のはじめの方に、竹取の翁と九人の若い娘たちとの間でやり取りされた一連の歌が掲載されている(3791番歌から3802番歌)。本論文で取り上げる万葉集3795番歌は、これら九人の娘たちから寄ってたかって馬鹿にされた竹取の翁が、彼女らを諭すために歌(長歌一首と反歌二首)を詠み、それを聞いた九人の娘たちのうちの一人が自らの行為を恥じて反省し詠んだ歌である。

万葉集3795番歌の訓釈を検討する前に、まず先行研究の訓釈について見ておこう。以下に、代表的な万葉集注釈書に掲載されている訓読文、原文、現代語訳、注釈を出版年の新しいものから順に掲載する。記載形式をそろえるため内容に影響を与えない範囲内で順序や記号表記などを一部変更し、漢字の旧字体は新字体で置き換えた。また、注目箇所には下線を引いた。

① 新日本古典文学大系^[1]

【訓読文】辱忍び 辱を黙して 事もなく 物言はぬさきに 我は寄りなむ

【原文】辱忍 辱尾黙 无事 物不言先丹 我者将依

¹ 佐賀大学 医学部 地域医療科学教育研究センター (takefu@cc.saga-u.ac.jp)

² 佐賀大学 文化教育学部 理数教育講座 (nishia@cc.saga-u.ac.jp)

【現代語訳】辱を忍び、辱をだまっ、何事もなく、かれこれ物を言わない先に、私はこの老翁に靡き寄りましょう。

【注釈】初句の原文、諸本「辱尾忍」。類聚古集・古葉略類聚鈔に「尾」の字なし。訓も、類聚古集・古葉略類聚鈔は「はぢしのび」。後者の本文が音数に適う。「辱忍び」は、仏教語「忍辱（にんにく）」の訓読語か。第二句、「辱を黙（もだ）して」の「黙」は「黙モダス」（名義抄）。「もだ」の語、既出「黙然（もだ）」（三五〇）。第三句の原文、諸本「無事」、尼崎本・広瀬本など「无」に作るに拠る。

② 新編日本古典文学全集^[2]

【訓読文】恥忍び 恥を黙して 事もなき 物言はぬ先に 我は寄りなむ

【原文】辱忍 辱尾黙 無事 物不言先丹 我者将依

【現代語訳】恥を忍び 恥と知っていて はしたない ことを言うより前に まずわたしはなびき寄りましょう

【注釈】恥忍び——この恥は、女が男に求婚する自媒（じばい）の羞恥。底本など原文に「辱尾忍」とあるが、類聚古集などに「尾」がないのによる。○恥を黙して——このモダスは顧みないで捨て置く意。第一句と共に寄りナムにかかる。○事もなき——あられもない。この事ナシは漢語「無事」の訓読語。『遊仙窟』の古訓に「無事」をアヂキナクと読んでいるところがある。そのアヂキナシは、どうにもならない、とんでもない、の意。

③ 講談社文庫（中西進）^[3]

【訓読文】恥を忍び 恥を黙して 事も無く もの言はぬ先に われは寄りなむ

【原文】辱尾忍 辱尾黙 無事 物不言先丹 我者将依

【現代語訳】恥かしい事をしたのにも堪えて言い訳せず、何を措いても、あれこれ言う前に老人に従いましょう。

【注釈】恥——失敗した事。序の態度をいう。○事も無く——とりたてた事もなく、とかくに及ばず。→八九七。

④ 萬葉集註釈（澤瀉久孝）^[4]

【訓読文】恥を忍び 恥を黙して 事も無く 物言はぬ先に 我は寄りなむ

【原文】辱尾忍 辱尾黙 無事 物不言先丹 我者将依

【現代語訳】愧すべきものを忍び、愧すべき事を黙つて、さりげなく、かれこれ云はずに、私は翁に靡き寄りませう。

【注釈】辱を忍び辱を黙して——代匠記に「班昭女誡第一云。謙讓恭敬先人後己。有善莫名、有惡莫辭。忍辱含垢、常若畏懼。是謂卑弱下人也。竹取翁すでに故事を引てよみつれば、仙女も此女誡の心にてやはぢをしのびはぢをもだしてとはよみ侍けん。翁にかくのりかへさるゝを聞に、ことはりいやちこ（灼然）なれば、此上はたゞ物いふことなくして、我は翁によりなんと成り」といひ、諸注も「辱」は翁に教訓され云ひこめられた事をいふと云はれてゐる。これに対し、小島憲之君は「萬葉集の表現」（『上代日本文学と中国文学』中）で、この「はぢ」は自媒の「媒」であるとし、「石川女郎が自ら男を求め、『自媒』に失敗して恥ぢ入つたこと、萬葉集卷二（一二六左注）にもみえるが、この歌の『辱』もこれに同じ。遊仙窟の五嫂のことに『女人羞自嫁、方便待渠招』とあるが、女人は『女因媒而嫁』ことが一般である。毛詩（齊風南山）の『薪をさくなら手斧がほしく、妻をめとるなら仲人がほし』（「析薪如之何、匪斧不克、取

妻如之何、匪媒不得]も、その一例。然るに自ら女人が自媒しようとすることは一種の恥辱である。従つて女人自ら男をよばふ恥を黙つてひた隠しにして、翁が言ひ寄る先に自ら言ひ寄らうと詠じたわけになる」と云はれたのが当つてゐる。即ちこの「辱」は石川女郎が「恥自媒之可愧」(二・一二六左注)と云つた愧づべきものを忍び、その愧づべき事をあらはさず、かくして、の意にとるべきだと思ふ。

事も無く物言はぬ先に我は寄りなむ——「無」の字、尼と類(十五・三五)とに「无」に作る。「事も無く」についても小島君が「第三句『事も無く』(サリゲナク、何事モナクの意)も、遊仙窟に『無事(ゆくりなくも)相逢』、『無事風聲(事のない、あらぬうわさ)徹他耳』などとみえ、恐らくこの『無事』を翻訳して歌語として用ゐたものであらう。山上憶良の長歌の一節(五・八九七)の『事も無く』も、この種の『無事』の訳語かとも思はれる。なほ遊仙窟の『無事』にはアチキナク(醍醐寺本その他)の古訓が附してある。これは神代紀(上)の古訓『無状』(アチキナシ)、遊仙窟古訓『無端』(アチキナシ)と同じ、『無事』は『無縁、無故』の意で、『無状』『無端』(形や端緒がない)と通ずることになる」と云はれてゐる。それに従ひ、さりげなく、と解する。「物言はぬ先に」は、かれこれ云はずに。「我は寄りなむ」は、我は翁に心ひかれ靡き寄らう、の意。

⑤ 日本古典文学大系⁵⁾

【訓読文】恥を忍び 恥を黙して 事も無く もの言はぬ先に われは依りなむ

【原文】辱尾忍 辱尾黙 無事 物不言先丹 我者将依

【現代語訳】恥をこらえ恥をだまっけて、無条件に翁に依り従いましょう。

【注釈】恥を忍び恥を黙して——ハザは翁にきつく言われたことを指す。○事も無くもの言はぬ先に——直訳すると不自然に聞えるが、今「文句なしに」などいう発想に近い。○依りなむ——翁に信頼し依存しよう。

上に示した五つの先行研究を見ると、それぞれいくつかの点で差異があることがわかる。まず原文に関しては、①と②が底本の発句「辱尾忍」を「辱忍」と改訂し、さらに①は底本の第三句「無事」を「无事」に改訂している。次に、訓読文については、①と②が発句を「恥忍び」と訓み、ほかの③、④、⑤は「恥を忍び」と訓んでいる。第三句については、②が「事もなき」と連体修飾語的に訓んでいるのに対し、ほかはすべて「事もなく」と連用修飾語的に訓んでいる。現代語訳に関しては、注釈書によって表現に多少の違いが見られるが(特に下線部に注目)、大ざっぱに言って「恥を忍んで、あれこれ文句を言わずに、翁に靡き寄りましょう」という内容ではほぼ一致している。

次の第2節では、上に示した五つの先行研究の問題点について検討し、続く第3節でこれらの問題点を解決できる新たな訓釈を提案する。

2. 先行研究における問題点

3795番歌に関する従来の訓釈には少なくとも三つの問題点がある。まず第一は、すでに要旨でも触れたように、原文第四句「物不言先丹」の訓み方である。通説は「物言はぬ先に」と訓んでいるが、「時」に関する「～する前(先)に」という表現は、本来「ある出来事があって、それよりも前に」という意味であるから、「物を言う前に」という表現は正しい用法だが、「物を言わない前に」は意味をなさない。実際、インターネットのGoogleで検索してみると「物を言わない前に」や「物を言わない先に」という表現は皆無である。ただし、「何も言わない前に」や「何も言わない先に」という表現はけっこう見受けられる。

しかしこれは、「何も言わないうちに」や「何も言わない間に」、あるいは「何か言う前（先）に」と言うべきところを、本人たちが間違いに気づかずに使っているにすぎないと思う。

このように、3795番歌の第四句を「物言はぬ先に」と訓むのは適切ではないが、前節に示した先行研究はすべてこのように訓んだ上で、この訓みに対して無理に現代語訳をつけている（前節の下線部箇所を参照）。特に②と③は訓読文で「物言はぬ先に」と訓んでおきながら、「言うより前に」や「あれこれ言う前に」と明らかに訓読文と矛盾した現代語訳をつけている。

第二の問題点は「物言はぬ」という表現に関するものである。まず「物言はぬ」という表現そのものが万葉集には例がなく、「言はぬ」という表現に限ってみても3795番歌のほかには3例しかなく、しかもこれらはすべて助詞に接続している。すなわち、「人に言はぬ 我が恋妻を」（2371番歌）、「あはれと君を言はぬ日はなし」（3197番歌）、「あはれの鳥と言はぬ時なし」（4089番歌）の3例である。「物言はぬ」のように「言はぬ」の前に名詞が付く例は一つもない。

さらに、発句に関して第三の問題点がある。前節に示した注釈書③～⑤は、底本の原文「辱尾忍」に従って「はぢをしのび=恥を忍び」と訓んでいるが、これだと六音の字余りになってしまう。句中に母音を含まない字余りであるから、この訓み方は異例である。一方、①と②は一部の写本に「尾」の字がないことを理由に底本原文「辱尾忍」の「尾」を削除して「辱忍」と改訂した上で「はぢしのび=恥忍び」と訓んでいる。これだと字余りの問題はなくなるが、新たな問題が生じる。すなわち、底本の原文に従い発句と第二句を「恥を忍び 恥を黙して」と訓むと、「恥を」が二回にわたって繰り返され、同音反復効果が生じるが、原文改訂した訓み方だと「恥忍び 恥を黙して」と少しバランスの崩れた訓み方になってしまう。

以上見てきたように、前節に示した先行研究（①から⑤）の訓釈には少なくとも三つの問題点があることが明らかになった。特に第一の問題点は重大である。次節では、これらの問題点を解消できる新たな訓釈を提案する。

3. 万葉集3795番歌の新しい訓釈

この節では、まず新しい訓釈の結果を示し、その後に具体的な根拠を個別に示していくことにしよう。まず3795番歌の原文、訓読、直訳、意識を示す。

【原文】辱尾忍 辱尾黙 無事 物不言先丹 我者将依

【訓読】辱を押し 辱を黙する こともなし 物言はず先に 我は寄りなむ

【直訳】恥を押し、恥を黙っていることもない、物を言わず、先に私は翁の言うことに従いましょう

【意識】私たち（九人の娘）を諭す翁の歌（3791番歌～3793番歌）を聞いて、自分たちのとった行為が失礼な恥すべきものであることがよくわかりました。こうなった上は、もはや恥を我慢して押し黙っていることもないでしょう。何も言わずに、ほかの皆に先駆けて、私は翁の言うこと（「老人は大事にするものだ」という教え）に従いましょう。

まず前節で指摘した第一の問題点から検討しよう。新しい訓読文では、歌の流れを第三句「こともなし」でいったん完全に切り、続いて第四句を「物言はず」と「先に」の二つの部分に分けて独立に訓み、「先に」を「ほかの仲間の娘たちに先駆けて」の意味で結句の「寄りなむ」にかかるものとして訓む。このように訓むと、前節で指摘した第一の問題点は解消する。通説の訓み方の問題は、ひとえに「物言はぬ先に」と第四句を一体として訓んだ点にあったのである。

さて、このような新しい訓み方に問題がないかどうか検討してみよう。新しい訓み方では、第四句「物不言先丹」が「物言はず、先に」のように句の途中で切れるため、不自然な訓み方だとも思われる。しかし、このように句の途中で文脈が切れる例はほかにもいくつかある。以下に二つだけ例を示す。

12/2912 人の見て 言とがめせぬ 夢に我れ 今夜至らむ 屋戸さすなゆめ
19/4258 明日香川 川門を清み 後れ居て 恋ふれば都 いや遠そきぬ

また、「物言はず」という訓み方は、ほかにも「物言はず来にて」という形が4例ある(503、3481、3528、4337番歌)。したがって、前節で指摘した第二の問題点もまた解消する。さらに、第三句の新しい訓み方「こともなし」についても、ほかにも2例ある。2502番歌の結句「飽くこともなし」と3773番歌の結句「良きこともなし」である。特に、前者の「こともなし」は動詞の連体形「飽く」に接続している点で、3795番歌の新しい訓み方「(恥を) 黙することもなし」と同じであることがわかる。

次に、第三の問題点について検討しよう。万葉集には「忍」の表記が16例あるが(今問題の3795番歌は除外)、内訳は、「忍坂山」と「忍咲八師=よしゑやし」が1例ずつ、残りは次の14例である。

「しのぶ=忍ぶ」という動詞の活用形... 8例

「おしてる=忍照、忍光」という「難波」にかかる枕詞... 6例

ここで地名の「忍坂山」と「忍咲八師=よしゑやし」の2例をひとまず横に置くと、上に示した14例から、万葉集においては「忍」の表記は、「しのぶ=忍ぶ」という動詞の活用形か、あるいは「おす」という動詞の連用形「おし」と訓まれるか、いずれかであることが結論される。なお、枕詞「おしてる=忍照、忍光」の「おし」は、万葉集1074番歌に「春日山押して照らせる(押而照有)この月は」(カッコ内は原文)とあることから推測されるように、「押す」あるいは「(上から) 押さえつける」という意味が原義だと思われる([6]、p.148)。「忍ぶ」という行為は「(怒りや苦痛などの感情を) 押さえつける」行為にほかならず、「おし=押し」の意に「忍」の字を当てるのは正訓表記の一つであり、ごく自然な発想だと言える。現代語でも「病を押しして仕事に出かける」という表現を用いるが、この「押しして」は「忍んで(辛抱して)」とほぼ同じ意である。ちなみに、これと同じ意味の「おして=押しして」の例が万葉集に一つある。

14/3550 おして否と 稲は搗かねど 波の穂の いたぶらしもよ 昨夜ひとり寝て

以上の考察から、3795番歌の発句「辱尾忍」は「はぢをしのび=辱を忍び」と訓むことも可能であるが、それと実質的に同じ意味の「はぢをおし=恥を押し」と訓むこともまた可能である。「恥の感情を押し殺して」の意である。この訓み方だと音数が五音となるばかりでなく、発句と第二句が「恥を押し 恥を黙して」となり、「恥を」の同音繰返し効果が期待できる。よって、前節で指摘した第三の問題点もまた解消することになる。

ところで、第四句の「先に」が、通説が言うような「(あれこれ言う) 前に」という意味ではなく、結句の「依りなむ」にかかるべきことは、九人の娘たちが詠んだ一連の歌の流れからも裏付けられる。この九つの歌の結句に注目すると、最初に「感(かま)けて居らむ」(3794番歌)が来て、次に「我は寄りなむ」(3795番歌)が来る。この後に「我も寄りなむ」が五首続き、「匂ひて居らむ」、「友のまにまに」で終わる。今問題の3795番歌は、まさにこの先頭から二番目の「我は寄りなむ」と初めて言った娘の歌である。

その後五人の娘が「我も寄りなむ」と続く。したがって、3795番歌の第四句の「先に」は、この歌がほかの皆に先駆けて真っ先に「我は寄りなむ」と言い始めた歌であることを示しており、また歌の前半の「辱を押し辱を黙する事もなし」という表現も、皆の先頭を切って最初に「我は寄りなむ」と行動を起こした娘の言葉として、真実味が感じられるのである。

最後に、澤瀉久孝氏は第2節の④の注釈で、この歌の「恥」について、万葉集126番歌の左注に登場する石川女郎の話の根拠に、女の側から男に求婚する「自媒（じばい）の羞恥」だとする小島憲之氏の解釈を紹介し、これに賛同している（②の注釈にも同様なコメントがある）。しかし、この解釈には首をかしげざるをえない。万葉集126番歌の左注を読むと、石川女郎が夜に老婆に変装して押しかけた相手の男（大伴田主）は「容姿佳艶、風流秀絶、見る人、聞く者、歎息せずということなし」と紹介されている。女性ならだれでもため息をつくほどあこがれる美青年である。であればこそ、石川女郎が「自媒」したというのも納得がいく。ところが、3795番歌においては、竹取の翁は白髪 of 老人であり、九人の娘たちから寄ってたかって馬鹿にされているのである。どうしてこのような老人に若い娘が「自媒」するのだろうか。小島憲之氏の解釈は理不尽と言うほかない。この歌を含む一連の歌をすべて考慮に入れて解釈する限り、この節の最初の意識に示したような常識的な解釈（契沖の説とほぼ同じ）をするのが適切ではなからうか。すなわち、この歌の結句の「寄る」は「自媒する」の意ではなく、「老人は大事にするものだ」という翁の教えに素直に従う、という意味として。

4. おわりに

本論文では、万葉集3795番歌の訓釈について再検討を行い、特に原文の第四句「物不言先丹」は通説のように「物言はぬ先に」と訓むのではなく、「物言はず、先に」と訓み、「先に」は結句の「寄りなむ」にかかるものとして解すべきであることを指摘した。また、発句「辱尾忍」についても、従来のように「恥を忍び」と訓んだり、あるいは「尾」を削除して「恥忍び」と訓むのではなく、「恥を押し」と訓むことにより、同じ意味を保ちつつ底本原文のまま五音として訓むことができることを示した。以上のような訓釈が妥当なものであるかどうか、多くの方々のご批判をおおぎたい。

参考文献

- [1] 「萬葉集四」、新日本古典文学大系、岩波書店、pp.20-21、p.71、2003年。
- [2] 「萬葉集④」、新編日本古典文学全集、小学館、p.97-98、1996年。
- [3] 「万葉集原文付全訳注（四）」、中西進、講談社文庫、p.24、1983年。
- [4] 「萬葉集注釋卷第十六」、澤瀉久孝、中央公論社、pp.66-67、1966年。
- [5] 「萬葉集四」、日本古典文学大系、岩波書店、pp.126-127、1962年。
- [6] 「時代別国語大辞典上代編」、三省堂、2005年。